

悠久の河

31

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

父と子

台風が過ぎ、雪の降り積もる季節が過ぎ、雨期が過ぎ、いくつもの季節が彌兵衛の上を通り過ぎて行った。幸いなことに、彌兵衛が剣山の岩を削り出してから、日吉村を大きな水害が襲うことはなかった。

彌兵衛がたった一人で削り続けた岩も、十年を過ぎたころから成果が目に見えるようになってきた。

この間、彌兵衛は正林寺の住職が説いてくれた言葉を何度も思い出した。

「あの小さな雨粒でさえ、たくさん集まれば大洪水となる。雨垂れは長い間には、石をも穿つと言う」

この十数年、彌兵衛は鑿を打ち込み、槌を振るいながら、ひたすらつるの姿が見えるのを待ち続けていた。

——こんなに人を恋しく思うのは、私の生涯で初めてかもしれない。——

彌兵衛は、つるの無邪気さを思い出しては心が和んだ。

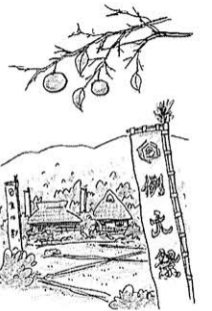
——それにしても、つるは、どうしたのであろうか。勘六が言い出さない限り、わしが言い出すわけにもゆくまい。困ったものだ。——

彌兵衛は、つるの様子が聞きたくて、足早に家に帰り、五郎太に尋ねてみた。

「勘六に、なんぞ変わったことはないか？」

「勘六さまでございますか？勘六さまは、いつものように、お役目に精を出しておられます。

変わったことと言えば……このごろ、よく咳を出しておられます。気候が不順ですから、旦那さまもお気をつけられた方が良くと案じております」



画 寺戸良信

五郎太は、彌兵衛の心も知らず、のんびりと答えた。

「もう良い、もう良い」

「さようでございますか」

——勘六は何をぐずぐず致しておる。嫁とつるを引き取りたいと一言言えば、クニもわしも誰も反対など致さんわ。——

彌兵衛は、いらいらした様子で呟いた。

享保九年（一七二四年）秋、彌兵衛が一人で岩を削り始めてから、実に十四年の歳月が過ぎていた。

抜けるような青い空が一面に広がり、村では豊作を祝う祭りの準備がなされ、幟が風にはためいていた。

彌兵衛は剣山の上からそれを眺め、満足そうな顔を見ると、岩に向かい鑿を打ち込み槌を振り上げた。

「季節が変わるのは、早いものよのお」

彌兵衛は風を感じて遠くの山に目を遣った。

その時、彌兵衛は長く伸びた自分の影に、もう一つの影が重なっているのに気付き、後を振り向いた。

「勘六ではないか、いかが致した」

彌兵衛の後ろには、野良着に身を包んだ勘六が、鑿と大槌を手に控え目に立っていた。